

## モアナ語と上代日本語

### — 日本語の起源を求めて —

佐伯 淳

キーワード：日本語の起源、モアナ語、上代日本語、基礎語彙、インドネシア系言語

#### 要 旨

日本語の起源については、北方由来説、南方由来説、北方と南方の混交説、またそのいずれでもない孤立した言語であると見解が分かれ、論争が続いてきた。この論考では、日本語の起源を探るのにスワデシュの基礎語彙を日本語にふさわしい構成に改訂し、それをもとにモアナ語とのつながりを検証した。その結果、偶然を超えた、きわめて高い確度で上代日本語とモアナ語の間に類似性があることが認められた。

日本語は謎の多い言語である。19世紀以降、比較言語学の発展のなかでゲルマン系、ロマンス系諸語の系統が詳細に記述されてきたのと対照的に、日本語の起源については確証のないまま論争が続けられてきた。これまで唱えられてきた説には大きくふたつのものがある。ひとつはツングース系諸語の仲間であるとする北方説、もうひとつはオーストロネシア系言語に由来するものであるという南方説である。

しかし、そのどちらも大方の支持を得るには至らなかった。どのように調べても日本語と近隣東アジア諸語、南方諸語とのつながりを示す決定的な証拠を提示することができなかったのである。このため、第三の可能性も指摘された。それは日本語が他の言語とは類縁関係をもたない、完全に孤立した言語であるという可能性である。

英語は日本語が起源であるとする吉原(1967)による衝撃的な説が現れたのも、このような混乱を背景としたものであった。吉原(1967)は292語の比較をもとに英語の起源が日本語にあることを示そうとした。次はその一部で、左が日本語、右がそれに対応するとされる英語である。

日本語	英語
boya (坊や)	boy (少年)
horu (掘る)	hole (穴)
namae (名前)	name (名前)
sikku (疾苦)	sick (病気の)

しかし、そこで提示された例は学術的な論議に耐えるものではなかった。たとえば、horu (掘る) / hole (穴) の例は動詞と名詞であり、品詞をまたいで対応させている。なによ

りも *sikku* (疾苦) / *sick* (病気の) は例証として適切ではない。「疾苦」は漢語由来の借用語であり、本来の日本語ではない。その他、*boya* (坊や) / *boy* (少年) などの例は偶然の一致と見るべきものである。

英語語源日本語説は荒唐無稽というほかない。しかしながら、日本語の起源が一躍、脚光をあびるようになったのは吉原(1967)による英語語源日本語説が発表されてからであり、その面での意義はあったと言えよう。この『英語語源日本語説』は現在、絶版となっているものの、原著および改訂版の序文が清水(1986)に収録されており、当時の議論の様子を知ることができる。

### 南方起源説の系譜

南方起源説への注目 日本語の北方、南方起源説とよばれるものはこれまで推測の域を出ることはなかった。しかし、近年、これまでの比較言語学的手法に加え、文化人類学的な観点からの研究により、オーストロネシア系言語への注目が高まってきた。

そのひとつが川本(2007)による南方諸語と日本語の比較である。川本(2007)は南方諸語の語彙を検証し、その結果、南太平洋のバヌアツ系、フィリピン系、ポリネシア系、台湾のアタヤル系、そしてインドネシアのスンダ系の5つを日本語の起源としている。

川本(2007)によれば、紀元前1千年の縄文時代、バヌアツ系の言語が日本に上陸し、続いて縄文後期、フィリピン系の言語とその文化が弥生文化を起こした。続く邪馬台国の時代にポリネシアのサモア系言語、台湾のアタヤル系言語、さらにインドネシアのスンダ系言語が渡来し、日本語が生まれたとする。

しかしながら、川本(2007)の研究は語彙の選定に恣意性がみられ、この点で説得力に欠ける。バヌアツ系言語から日本語に渡来した例としてあげられているのが「睦月」(1月)

の語頭の音「む」である。オセアニア系諸語の祖語では〈前面、正面、先頭〉の意を表す語は \**muqa* であったという。バヌアツでは1月のことを「ムアンブラと」よび、これは「1」の意の「ムア」、助数詞の「ン」、月を表す「ブラ」から来たもので、この「ム」が日本に伝わったものだという。

さらに日本語とバヌアツの言語にみられる共通の特徴として名詞の独立形と接続形の母音交替があげられている。接続形とは合成語のなかで使われる形である。「木」を単独で使えば、「き」であるが、「こかげ」(木陰)のように他の語の一部となれば「き」が「こ」に変化する。しかしながら、英語においても *foot/feet*, *sing/sang* のように母音交替はふつうにみられる現象である。

川本(2007)の試みは意欲的ではあるものの、日本語と南方諸語にみられる例の取り上げ方が恣意的と言わざるをえない。

基層をなす南方語 日本語と北方、南方諸語について緻密な考証を行ったのがヴォヴィン(2009)である。これはイルカの名称の比較から上代日本語、アイヌ語、琉球語のかかわりについて考証したもので、その緻密な手法は日本語起源研究のモデルとなるものである。

ヴォヴィン(2009)は琉球祖語と上代日本語のかかわりに注目する。「土」は琉球祖語で \**mita* という。これは上代日本語の *tuti* とはあきらかに系統が異なる。しかし、上代日本語の例をつぶさに見ていくと、出雲には「湿地」という意味で *nita* あるいは *nuta* があり、中央日本語では「土」は *ni* であった。現代日本語に残る「つち」は上代韓国語の \**tute* から来たものであるという。すなわち、朝鮮半島から入った語が琉球祖語と上代日本語のつながりを見えにくくしているというのがヴォヴィン(2009)の考えである。

さらに、上代日本語には北方からの語彙も流入し、これも琉球祖語とのつながりを見えにくくしている。現代琉球語にはイルカを指

すことばに「ふいとう」(fit'u)という語があり、これは琉球古語 *feto* にさかのぼる。さらにこれは琉球祖語の推定形 \**peto* にさかのぼると考えられている。この[*ɸ*]、[*p*]の音声的対応は日本語の歴史的変遷においてもみられるもので、琉球語と日本語のつながりを示す証左のひとつである。

ところが、上代日本語には \**peto* に対応する語はない。上代日本語では、イルカは現代日本語と同じく、「いるか」とよばれていた。ところで、樺太アイヌ語、千島アイヌ語には鯨を指す語として *rika* があり、これがイルカを表す語として上代日本語に入ったという。日本語の起源の基層は南方の言語にあり、それに北方ツングース系の言語が影響を与えたというのがヴォヴィン(2009)の考えである。

### 琉球祖語とモアナ語

琉球祖語の起源 ヴォヴィン(2009)の考証が示すのは琉球祖語が日本語の起源と深くかかわっているという事実である。では、琉球祖語の源となったのはどの言語だろうか。日本語が琉球祖語から伝わったものであるなら、琉球祖語の源はさらにその南方にあると推定される。そして、その有力な候補と考えられるのがオーストロネシア系言語のうち、インドネシア系に属するモアナ語である。

モアナ島は日本列島とは大きく隔たる距離にありながら、その言語・文化は上代日本語とその時代の習俗にきわめて近い。モアナ語とその文化は縄文の時代、海洋を伝って日本列島に到達し、日本語とその文化の源流を形成したと考えられる。

南方説のはじまり 日本語南方起源説の歴史は古く、これがはじめて唱えられたのは1887年のことである。Wade (1887)は「モアナ：最後の楽園」という報告のなかで、モアナ語が奇妙に日本語と似ている点を報告し、両言語の類縁関係の可能性に言及した。しかし、不

幸だったのは彼が寄稿したものが学術誌ではなく、一般の雑誌であったことである。このため、この記事は学界で注目を集めることはなかった。

長く埋もれていたこの記事に注目し、それに光をあてたのが Morris (1976)である。モリスはモアナ島での現地調査をすることできなかった。しかし、彼はバリ島に移り住んだモアナ島住民の一家をインフォーマントとしてモアナ語の系統的な記述に取り組んだ。そして Wade (1887)の報告が言語学的にきわめて正確なものであることを示した。

これに触発され、1978年、国際地理学協会はギブソンを隊長とするモアナ島探査隊を派遣した。しかし、探査隊があと一歩で目的地に到達しようとするそのたびに行く手に厚い霧が立ちこめ、ついにモアナ島に到達することはできなかった (Gibson, McNally, & Herbert, 1979)。

### モアナ島への道

伝説の島 モアナ語と上代日本語を比較しようとする際、壁になるのが情報の不足である。モアナ語の語彙リストとしてこれまで利用可能であったのは Wade (1887)と Morris (1976)による報告である。Morris (1976)の収集した語彙は広範にわたる。しかし、この語彙表は現地で作成されたものではなく、バリ島に移住した家族による聞き取りをもとにしたものであり、バリ島の言語がまぎれこんでいる可能性がある。実証的な研究には現地での実地調査がぜひとも必要である。しかし、モアナ島への到達そのものが調査の大きな壁となってきたこともまた事実である。

モアナ島の存在は古来、船乗りの間でひそかに語りつがれてきた。しかし、Wade (1887)以外、島に到達した記録はなく、モアナ島はいわば伝説の島であった。ウェイドの報告が学術誌に取り上げられず、一般の雑誌に掲載

せざるをえなかったのもこれがその理由であった。東南アジアの漁民の間ではモアナ島の存在を口外することを避けるならわしがある。あたかもモアナ島の存在を隠し通そうとする強い意志がはたらいているかのようだ。「モアナ島を訪ねた」と口にする人、「私はモアナ人だ」と言い張る人は多くの場合、偽物である。モアナ人をインフォーマントとしてモアナ語を記述したモリスの報告が当初、強い信頼を得ることができなかつたのも、インフォーマントが本物のモアナ人であるのか、その疑いが消えなかつたからだ。

本研究におけるもっとも大きな壁はモアナ島に到達することであった。モアナ島は伝説の島とされており、通常的手段では到達することができない。私がとった方法は福建省出身の中国人と称してインドネシア、スラバヤの漁師に弟子入りすることであった。そこで徒弟として1年半を務めた後、親方の信頼を得るに至り、モアナ島同行を許された。

モアナ島到着 スラバヤを出航して3日後、海はみるみる霧が立ちこめ、真っ白な周囲の中、数時間、船は進んだ。モアナ島が謎の島とよばれ、その存在が確認できなかったのはこれが原因であったようだ。ギブソンたち探査隊の記録でも、目標に近づこうとするたびに霧が立ちこめ、何度も珊瑚礁に座礁しそうになる危険に遭遇している(Gibson McNally, & Herbert, 1979)。宇宙からの衛星写真による探査でも衛星がジャワ海にさしかかるたびに海上に霧が広がったという。

しかし、土地の漁師にはこのような霧は障害にはならない。親方は霧の中、迷うことなく船を進め、珊瑚礁の切れ目をたくみに縫って進んだ。すると、突然、青い空が開け、そこに低い山がおだやかに連なる緑の島が現れた。モアナ島であった。

島は端から端まで歩いてまる1日ほどの大きさである。人口は集落の数、規模から概算してほぼ3万人ほどであろう。日本でいえば

瀬戸内海の小豆島ほどの島である。

モアナ島では村長、チネン氏の家に滞在することを許され、村人への聞き取りにより語彙の収集、音声と文法の記述を行った。

### 基礎語彙からの考察

語彙比較の手順 英語語源日本語説をとらえた吉原(1967)の論考の大きな欠陥は、検証した292語の取り上げ方が恣意的であるという点であった。ふたつの言語に音声、意味が似通った単語が偶然、存在するというのは十分ありうることである。英語と日本語でも、so [sou]と「そう」、joke [dʒouk]と「冗句」、fall [fɔ:l]と「降る」、tremendously [trəməndəsli]と「鳥、目を出すように→ものすごく、とても」のように偶然、一致する例はいくつも例をみつけることができる。

語彙をもとに言語間の類縁関係を探るには恣意性を排した実証性のある手順が必要である。言語は時代とともに変化する。また、異文化と接するなかで変容を起こす。このため、語彙を比較するには時代の変化、異文化との接触に強い抵抗性をもつ語彙を選ぶ必要がある。それは、数詞、親族名称、身近な自然現象など言語生活の基本にかかわる語彙である。このような語彙はその言語文化の中心をなすもので、変化に対する強い耐久性をもち、年代を経ても元の形をよく残すという特徴をもっている。

基礎語彙による比較 このような観点から、変化に対する強い耐久性をもつ語彙を選定したのがSwadesh (1971)である。これは「スワデシュの基礎語彙」という名前でその後、広く知られることとなった。この基礎語彙は当初、約200語を選定したもので、その後、改訂を経て最終的に100語にまとめられた。(付表1参照)

この基礎語彙を用い、統計的な観点から日本語とアジア諸言語の類縁関係を探ったのが

安本・本多(1978)である。この研究では日本語の起源として4つの層の存在を推定している。1番目の層は日本語のもっとも古い層と考えられるもので、これは中国の周辺に位置する朝鮮語、満州語、アイヌ語である。第2の層は南方、インドネシア、カンボジア方面から入ったもの、第3の層は中国、江南地方から入ったもの、第4の層は中国語の影響によるものである。

安本・本多(1978)による考証が画期的なのは統計的手法を用いて日本語とアジア諸言語の基礎語彙を比較した点である。基礎語彙をもとに考証するその手法は以後の日本語起源研究のモデルとなった。しかし、この研究ではひとつ大きな視点が見落とされていた。それはスワデシュの基礎語彙をそのまま使った点である。スワデシュの基礎語彙は英語を基本としたもので、ドイツ語、オランダ語などのゲルマン系言語、さらに他の西欧諸語との比較においては有効である。しかし、西欧諸語と基本的に言語文化を異にする日本語については必ずしも適切とは言えない。

**基礎語彙の検証** そのひとつが基礎語彙における色彩語の選び方である。色彩の認識は文化により異なる。スワデシュの基礎語彙には色彩語として white (白)、black (黒)、red (赤)、green(緑)とともに yellow (黄色)の5色が入っている。しかし、万葉の時代、日本語、日本文化における色の基本は白、黒、赤、青の4色で、黄色はなかった。また、greenは上代日本語では「青」であった。「青」は白と黒の間のさまざまな色合いを表す、幅広い語であった。このため、日本語について比較を行うのであれば、比較対照となる基礎語彙から「黄色」をはずし、greenに対して「緑」でなく「青」を対応させる必要がある。

スワデシュの基礎語彙には家畜にかかわる次のような語が入っている。

claw (つめ)      grease (あぶら)

horn (角)      liver (肝臓)  
tail (尻尾)

これらは家畜の飼育および肉食を基本とするヨーロッパ文化反映したものである。日本文化を反映させるためには「こめ(米)」や「いね(稲)」、「すし」、「てんぷら」を選ぶのがふさわしい。

スワデシュの基礎語彙は内容語だけでなく機能語についても、西洋諸語が基本になっている。そのひとつが指示代名詞のとり上げ方である。スワデシュの基礎語彙には指示代名詞 this、that が収録されている。しかし、日本語では「これ」「あれ」とともに「それ」を収録する必要がある。指示代名詞は英語では近称(this)、遠称(that)のふたつであるが、日本語では近称(これ)、中称(それ)、遠称(あれ)の3つである。

このような検討を経てスワデシュの100語の基礎語彙を日本語にあわせて改定したのが付表2である。これは現代日本語、上代日本語、モアナ語について改訂基礎語彙を対照させて示したものである。なお、この基礎語彙からはスワデシュの基礎語彙にある earth (土)をはずしている。「つち」は上代、朝鮮半島から入った借用語との説があることを考慮したものである(Vovin, 2007)。

### 基礎語彙による比較

**代名詞** 日本語とモアナ語が密接な類縁関係にあること、それが偶然のものでないことは、たとえば次の代名詞を比べるだけで十分であろう。

現代日本語	上代日本語	モアナ語
私	わ	wa
これ	こ	ko
それ	そ	so
あれ	か	ka

現代日本語とモアナ語を比べた場合、代名詞の類似は必ずしも大きなものではない。とりわけ現代日本語の「あれ」とモアナ語の ka は全く異なっている。しかし、上代日本語とモアナ語を比べたとき、その様相は一変する。モアナ語の代名詞は上代日本語のそれと寸分異なるところがない。これはモアナ語が他の文化と接触することがなく、古い形態がそのまま維持されたのに対し、日本列島に伝わったモアナ語は日本語として定着した後、上代以降、代名詞の形態に変化を生じたためと考えられる。

親族名称 代名詞と同じく、「父」、「母」などの親族名称も変化に強い抵抗力をもつ。付表2の改訂基礎語彙には次の6つの親族名称を収録している。

現代日本語	上代日本語	モアナ語
父	ちち	tit'i
母	おも	omma
兄	あに	nii
姉	あね	nee
弟	おとうと	ototto
妹	いも	ömotto

「母」の上代語「おも」についてはいささか注釈が必要である。韓国語で「母」を表す語には「オモニ」(어머니)とともに「オンマ」(엄마)がある。これはモアナ語の omma が上代日本に伝わり、そこからさらに朝鮮半島に伝わったものと考えられる。

現代日本語で「兄」「姉」のことを「にいちゃん」「ねえちゃん」と呼ぶことがある。これはモアナ語に由来する古い形と考えられる。方言圏論 言語は中央から地方に伝播する。それはあたかも水面に石を投げると、その波紋が同心円となって外に広がっていくのと似ている。時代を経て同心円が遠くに達した頃、元来の発祥の地ではその語は廃れ、それに代

わって別の語が生まれ、それが新しい同心円を描いて広がり始める。すなわち、言語は中心から同心円を描きながら次々に新しいことばを伝播させていく。これが方言圏論とよばれるものである。

その方言圏論にそった現象を上代日本語に見ることができる。次は鼻音を含む基礎語彙の例である。

現代日本語	上代日本語	モアナ語
なぜ	など	nando
耳	みみ	mimmi
髪	かみ	kammi
首	くび	kumbi
飛ぶ	とぶ	tombu
長い	ながし	ngangasö
寒い	さむし	sammusö
水	みず	minzu
山	やま	yamma
雨	あめ	amme
雲	くも	kummo
煙	けぶり	kemburi
芋	いも	ömmo
種	たね	tanne
右	みぎ	möngö
米	こめ	komme
犬	いぬ	önnu

これらの鼻音は現代の東方地方の発音にきわめて近い。これはモアナ語が日本列島の南から北に伝播していったことを示している。何百年にわたる伝播のなかで列島南部から東北地方にモアナ語が伝わったときには、列島南部では鼻音が落ちる変化が起こっていた。言い換えれば、東北地方のことばは日本に上陸したモアナ語の古い形をよく残したものである。

中舌母音 これは鼻音だけでなく、中舌母音についても同様である。東北では「越後のいちご」は「えつごのえつご」のように発音さ

れる。この母音は[e]と[e̞]の中間の音価である。モアナ語ではこの音は中央寄りの音で[ʌ]または[ə]の音価で、基礎語彙表では次のようにöで示している。

現代日本語	上代日本語	モアナ語
西	にし	nösö
後ろ	うしろ	ösöro
白	しろ	söro

母音の数 上代日本語の母音の数にはいくつかの説がとなえられてきた。5音、6音、8音が代表的な説である。しかし、上代日本語の起源がモアナ語であるとするなら、それは6音であったと言える。

次はモアナ語の母音図で、6つの母音を認めることができる。上代日本語の母音もこれと同じであったと考えられる。

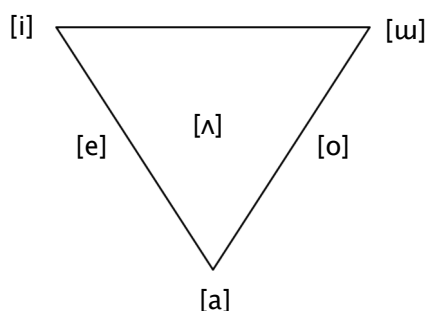


図1 モアナ語の母音

基礎語彙表でöで示した音 [ʌ] は上代日本語ではその後、消滅したものの、東北地方では残ることとなった。東北地方はモアナ語が伝わった日本列島南部から遠かったため、南部で起こった音変化の伝播が及ばなかったのである。東北のことは上代日本語の古い形、さらに言えばモアナ語をよく残したものと言える。

唇音とその変化 モアナ語が上代日本語の源であったことの証左は唇音についても見ることができる。日本語の「は」行音は平安期、

両唇音であったことが知られている。それ以前は「ば」であった。基礎語彙に収録した語で語頭に「ば」を含むのは次の3つである。

現代日本語	上代日本語	モアナ語
鼻	はな	pana
花	はな	pana
葉	は	pappa

モアナではこの語頭の [p] はそのまま残ったのに対し、日本に上陸したモアナ語はそこで [p] → [ɸ] → [h/ç] という変化をたどり現代日本語の音を形成した。なお、現代日本語の「葉っぱ」は pappa から来たものである。単音節語の長音 関西地方では「木」、「目」のような単音節語は「き」、「め」でなく、「きい」、「めえ」のように長音化することが知られている。これと同じ現象をモアナ語に見ることができる。

現代日本語	上代日本語	モアナ語
女	め	mee
目	め	mee
手	た	taa
日	ひ	fii
木	き	kii
火	ひ	fii
夜	よ	yöö
音	ね	nee
名	な	naa

関西のことはモアナ語の音声の特徴をよく残している。

モアナ語を調べていくと、まるで上代日本語を見ているような不思議な感覚にとらわれる。これまで上代日本語の音声、語彙、文法は後世の日本語から推定せざるをえなかった。しかし、モアナ語がその祖語であることが確実となった今、その扉が開かれようとしている。モアナ語を研究することで上代日本語の

姿を再構築することができるのである。

### モアナの言語文化

言語と文化 言語は文化と切り離しがたく結びついている。日本語の「湯」は英語で言えば hot water である。しかし、日本語では「熱い水」と言うことはできない。「水」という語には「冷たい」という属性があるからだ。日本語では冷たいか、そうでないかで「水」と「湯」を区別して認識する。それに対し、英語では water についてそのような見方はしない。北米先住民のホピは水を認識するのに、川や湖、滝のように自然に存在する水を pahe、コップやビンなどにくみ取った水を keyi と区別して認識する (Whorf, 1940)。言語は現実の世界を文化ごとに異なった方法で切り取り、認識する。言語の系統はことばだけでなく文化をあわせて探ることで考証の実証性を高めることができる。

言語の伝播は文化の伝播をともない、文化の伝播は言語の伝播をとまなう。言語の系統を研究するということは文化の成立とその伝播の研究をすることにほかならない。次は日本語に入ったサンスクリット語の例である。

日本語	サンスクリット語
旦那	dana
奈落	naraka
瓦	kapala
袈裟	kasaya

「袈裟」を除けば、これらの語は現代では仏教とのつながりは見えにくくなっている。しかし、これらの語は元来、仏教、寺院にかかわることばとしてサンスクリット語から日本語に入ったものである。サンスクリット語の日本語への移入は仏教の伝来と表裏一体をなすものであった。

モアナ語の日本列島への到達もまたモアナ

の文化と一体のものであった。モアナの民俗文化を見ると、日本のそれときわめてよく似ていることに驚く。日本文化の源流はモアナにあり、その言語とともに日本に入ったものと見てまちがいない。

ウタキと歌垣 万葉の時代から伝わる習俗に歌垣とよばれるものがある。山や野に男女が集まり、たがいに歌を交わしあう、出会いの場である。とりわけ筑波のそれはよく知られていた。万葉集の巻九に収められた次の歌はその様子をよく伝えている。

驚の住む 筑波の山の 裳羽服津の  
 その津の上に 率ひて  
 娘子壮士の 行き集ひ かがふかがひに  
 人妻に 我も交らむ 我が妻に 人も言問へ  
 この山を うしはく神の 昔より 禁ぬわ  
 ざぞ  
 今日のみは めぐしもな見そ 事もとがむ  
 な

ここで「かがひ (燿歌)」というのは歌垣の別称である。

これと同じ習俗がモアナにもみられる。モアナ語でウタキ(ut'aki)とよばれるものがそれである。ウタキは満月の夜、かがり火をたいて行われる。フォークダンスをするように内側に女が、その外側に男が輪をつくる。竹を乾燥させて長さを切りそろえた、木琴のようにバチでたたいて音を出すコトランが軽やかに曲を奏で始める。すると女は時計回りに、男は時計と逆回りに踊りながら進む。曲が終わったところで正面になった男女が向かい合い、なぞなぞを出し合う。「朝になるとどうして夜があけるのか」「夜があけないと朝にならないからだ」といったやりとりでかけひきが行われる。

しくみは単純だが、実際にやってみるとなかなかむずかしい。私も輪に加わってみると



後ろの男に押されて転びそうになった。しかたなく前の男の背中を押して前に進むことになる。前の男がそこで止まってなかなか前に進まないこともある。後ろからは踊り手が迫るので板挟みになる。

これはかけひきのひとつなのである。男も女も相手になりたいと考えている人がおり、曲が終わったところで自分がその相手の正面に来ようみはからい、進み方を加減するのである。

はじめて参加したとき、曲が終わって私の正面に来たのは、74歳になるオハナばあさんであった。ウタキは未婚に限らず既婚の男女も加わることができる。オハナさんは3年前に連れ合いを亡くし、独り身であった。当時、私は村長、チネン氏の家に住み込みながら、オハナさんの家に通い、モアナ語の記述を行っていた。その翌日から私を見るオハナさんの目はまわりつよく色っぽくなった。

このウタキという習俗がモアナ語とともに日本列島に伝わったことは椎名 (1999)による報告からも検証できる。これはボルネオ島に近いフンデロツテ島における生活を記録した椎名総之助氏の報告である。フンデロツテ島ではカメまつりの日の最大のよびものがカメ踊りである。これはカメの甲羅を背中につけて踊るもので、赤ガメ、青ガメのふたつがある。赤と青、それぞれの甲羅をつけた男女が踊り、リズムがうまくあわなければ一対になることが許されない。これは男女のお見合いの機能をあわせもつ行事で、上代日本における歌垣と同じである。

このフンデロツテ島がボルネオに近い位置にあるという地理的条件は重要である。それはこの習俗がモアナ島から島伝いに北方に伝わり、フンデロツテ島、琉球諸島を経て日本列島に到達したことを示すものだからである。ウラナヘア モアナ人の習俗で現代の日本人の心性と深くつながっているのが、ウラナヘア (uranahea)への強い執着である。この語は

上代、日本に到達した後、強勢のない語尾の母音 [a] が脱落して [uranahe] となり、さらに [e] から [i] への音変化により [uranahi]、すなわち「ウラナヒ」と変わった。その後、[h]の脱落により現代日本語の [uranai] (占い)に至ったものである。

モアナ島でははじめて会った人が必ずたずねるのは「あなたは何型ですか」という質問である。これは頭のつむじの形を聞いているのである。このウラナヘアをブラドタエパ (bradotaepa)とよぶ。ブラドタエパには4つの型があり、右巻きを「アカウ型」、左巻きを「ハマ型」、中央から放射状に拡散しているものを「ハリー型」、右巻きと左巻きの混合形を「アカハマ型」とよぶ。

モアナの社会では人の性格はブラドタエパによりが決まるとの根強い考えがある。アカウ型は几帳面で繊細、ハマ型は明るくのびのび、ハリー型は意思がつよく意地っ張り、アカハマ型はクールだが飽きっぽいとされる。

私のつむじは右巻である。「あなたのブラドタエパは？」と聞かれれば「アカウ型だ」と答える。しかし、たいてい信じられないという表情で「イトハラ！」(Itohara!)ということばが返ってくる。「イトハル (=偽る)」から来た語で「うそ！」ほどの意味である。頭をつかまれ、髪の毛をかきわけ、調べられたこともある。気の毒なのは頭のはげあがった年寄りである。何とでも答えられるので、聞かれることもない。

ブラドタエパと並ぶ代表的なウラナヘアにエウエサ(öwö-sa)がある、「エウエ」は魚、「サ」は位置ほどの意で、訳せば「魚座」である。魚座とは人の生まれた時期をもとに占う運勢で、全部で次のような13のエウエサがある。

イシモチ	クマノミ	トビウオ
グッピー	スズメダイ	タコ
クラゲ	オニヒトデ	ウツボ
クマノミ	ブダイ	ミノカサゴ

モアナの村にはエウェサを担当する人がいて、毎朝、村の広場の掲示板に「今日の運勢」を張り出す。「ミノカサゴ 小さなことでクヨクヨしそう。そんなときは深呼吸して気持ちをゆったりと。ラッキーカラーは緑」といった内容である。人々は漁に出る前にこの運勢を見て、一喜一憂し、なかには服を着替えに返る人もいる。

ケタ モアナに古くから伝わる通信手段にケタ(keta)がある。モアナではたいていの人が所持している。なかには二つ、三つ持ち歩き、使い分ける人もいる。これはかまぼこ板ほどの木の板で、それに木の小さな細い板が5つ、並べて取り付けられている。ちょうどかまぼこ板に洗濯ばさみを5つ載せたような形である。5つの小さな板にはバネがついていて、鍵盤のように叩くことができる。鍵盤を左から叩くとドレミソラの音階になる。これは西洋音階の長音階のうち、第4音(ファ)と第7音(シ)を欠いたもので、日本の伝統音楽の特徴をなすヨナ抜き音階と同じである。ここにも日本文化の源流を見ることができる。

ケタの木材はよく乾燥させてあり、鍵盤を叩くと軽やかな音が出る。それぞれ自分のメロディーを決めていて、通信する場合にはまず鍵盤で自分のメロディーを奏でる。するとそれを聞いた相手はだれからの通信であるかわかる。通信は鍵盤をモールス信号のように叩いて行く。慣れないと鍵盤を探して叩くの難儀をするけれども、若い人は1分間に80文字程度は軽く打ち込むことができる。ふつうは左手にケタを持ち、右手の指で鍵盤を叩く。しかし、若い人はケタを片手に持ち、その親指だけで鍵盤を操作する人が多い。

モアナに古くから伝わるケタも、今では競争が激しい。ケタを作っている工房は3つあり、それぞれ半年ごとに新しい型の製品を発表し競っている。目下、最大の関心はケタの弱点とされる通信距離である。音で通信するため、隣の家のように離れていたり、同じ家

の中でも壁などで遮られていたりすると音が届きにくい。このため、木材の材質、乾燥の具合を改善することで通信距離を伸ばす工夫が繰り返されている。それでも音の届かない場所もあり、そのような環境や状況をケナガヒ(kenagahi)とよぶ。

万葉集など上代日本語の文献には「けた」は見えない。しかし、九州から近畿圏にかけて万葉仮名で「気比多比」(けひたひ)と記した木簡とケタに似た小形の木材が多数みつまっている。モアナの「ケタ」という語は上古の時代、発音に [ci] が付加され、その実物とともに日本列島に伝わったものと推測される。

## 結 語

言語の系統をたどる研究は綿密な考証を要する作業である。どの言語にも形と意味がよく似た語が存在する。それが偶然により生じたものか、伝播により生じたものかを判別するには実証的な手法による比較が必要である。

本研究ではスワデシュの基礎語彙を日本語、日本文化に沿って改訂し、モアナ語との比較を行った。その結果、モアナ語と上代日本語の間には偶然を超えた、きわめて高い確度で共通性が認められた。

さらにその共通性に大きな信頼を与えるのは上代日本とモアナ島の文化人類学的考証である。従来、日本的、あるいは日本文化的といわれてきた特性の多くをモアナの文化に見いだすことができる。その言語と文化は上代日本の言語と文化ときわめて近似し、その類似は驚くほどである。

改訂基礎語彙による比較は日本語の祖語はモアナ語にたどることができることを示している。その言語はモアナ島から北上してフンデロット島に伝わり、さらに黒潮に乗って琉球諸島を経由し、日本列島に達した。

上代日本語とその文化はこれまで未詳とされてきた部分も多かった。しかし、モアナ島

の言語と文化が上代日本の言語文化を古い形のまま残していることが確実となった今、モアナ語とその文化を研究することで、上代日本の言語と文化を解明する大きなてがかりを得たと言えよう。

## 参照文献

- 川本崇雄 (2007) 『オセアニアから来た日本語』東洋出版
- 椎名誠 (1999) 『ずんが島漂流記』文藝春秋
- 清水義範 (1986) 『蕎麦ときしめん』講談社
- ヴォヴィン、アレキサンダー (2009). 「琉球語、上代日本語と周辺の諸言語：再構と接点の諸問題」『日本研究』 39, 11-27.
- 安本美典・本多正久 (1978). 『日本語の誕生』大修館書店
- 吉原源三郎 (1967) 『英語語源日本語説』風狂書房
- Gibson, D., McNally, S. L., & Herbert, R. (1979, October). The Mystic Island of Maona: The Unfinished Expedition. *International Geographic*, 184(4), 32-37.
- Morris, W. (1976). The Syntactic and Lexical Structure of Moana. *Pacific Journal of Linguistics*, 17(2), 17-35.
- Swadesh, M. (1971). *The origin and diversification of language*. Chicago: Aldine, Atherton.
- Vovin, A. (2007). Once again on doublets in Western Old Japanese. In B. Frellesvig, M. Shibatani, & J. C. Smith (Eds.), *Current Issues in the history and structure of Japanese* (pp. 351-374). Tokyo: Kurosio Publishers.
- Wade, W. (1887, June). Moana: The Last Paradise. *The Pacific Monthly*, 169, 37-52.
- Whorf, B. L. (1940). Science and Linguistics. In J. B. Carroll (Ed.), *Language, thought, and reality* (pp. 207-219). Cambridge, MA: The M.I.T. Press.

付 表 1

## スワデシュの基礎語 100

I	you	we	this
that	who	what	not
all	many	one	two
big	long	small	woman
man	person	fish	bird
dog	louse	tree	seed
leaf	root	bark	skin
flesh	blood	bone	grease
egg	horn	tail	feather
hair	head	ear	eye
nose	mouth	tooth	tongue
claw	foot	knee	hand
belly	neck	breasts	heart
liver	drink	eat	bite
see	hear	know	sleep
die	kill	swim	fly
walk	come	lie	sit
stand	give	say	sun
moon	star	water	rain
stone	sand	earth	cloud
smoke	fire	ash	burn
path	mountain	red	green
yellow	white	black	night
hot	cold	full	new
good	round	dry	name

付 表 2

## 改訂基礎語彙 100

現代日本語	上代日本語	モアナ語
私	わ	wa
これ	こ	ko
それ	そ	so
あれ	か	ka
誰	た	ta
何	なに	nannu

なぜ	など	nando	大きい	おほぎ	ohöki
ひとつ	ひ	fi	小さい	ちひさし	t'ösasö
ふたつ	ふ	fu	長い	ながし	nangasö
みつつ	み	mi	丸い	まろ	marösö
よつつ	よ	yo	暑い	あつし	assö
いつつ	い	i	寒い	さむし	sammusö
父	ちち	tit'i	新しい	あらたし	aratasö
母	おも	omma	良い	よし	yossö
兄	あに	nii	悪い	あし	assö
姉	あね	nee	日	ひ	fii
弟	おと	ototto	月	つき	tuk'i
妹	いも	ömotto	星	ほし	fosi
人	ひと	fito	水	みず	minzu
男	を	wo	山	やま	yamma
女	め	mee	川	かは	kafa
頭	かぶ	kabu	海	うみ	ummi
耳	みみ	mimmi	空	そら	söra
目	め	mee	風	かぜ	kaje
鼻	はな	pana	雨	あめ	amme
口	くち	kut'i	雲	くも	kummo
手	て	taa	煙	けぶり	kemburi
足	あし	asi	塩	しほ	sifo
髪	かみ	kammi	乳	ち	tötö
肩	かた	kada	石	いし	össö
首	くび	kumbi	木	き	kii
腹	はら	haraha	枝	えだ	öda
顔	かほ	kaho	花	はな	pana
見る	みる	miruru	芋	いも	ömmo
聞く	きく	kikuku	種	たね	tanne
思う	おもふ	mofu	葉	は	pappa
寝る	ぬ	nuu	朝	あさ	asit'a
食べる	くふ	kufu	火	ひ	fii
飲む	のむ	nomu	夜	よ	yöö
言う	いふ	ifu	家	いへ	öhe
歌う	うたふ	utafu	東	ひがし	hingasö
与える	あたふ	atafu	西	にし	nösö
立つ	たつ	tat'u	右	みぎ	möngö
来る	く	ku	左	ひだり	hindarö
歩く	あゆむ	anyömu	前	まへ	mahe
飛ぶ	とぶ	tombu	後ろ	うしろ	ösöro

夢	いめ	imme
音	ね	nee
名	な	naa
米	こめ	komme
稲	いね	önne
すし	すし	sösö
てんぷら	てんぷら	tefora
魚	いを	öwö
鳥	とり	totöri
犬	いぬ	önnu
赤	あか	akka
青	あを	awö
黒	くろ	köro
白	しろ	söro